

チェルノブイリとフクシマを結んで ロシアのチェルノブイリ被災地からカーチャさんを迎えて この夏、福島、広島・長崎、大阪で交流を深めました

8月4～9日、広島・長崎で開催された「被爆71周年・原水禁世界大会」に参加するため、ロシアのチェルノブイリ被災地のNGO「ラディミチ-チェルノブイリの子どもたちのために」のエカテリーナ・ブニコワさんが「原水爆禁止国民会議」（原水禁）の招聘で来日しました。エカテリーナ（愛称：カーチャ）さんは、「ラディミチ」のスタッフとして「チェルノブイリ情報センター」を担当し、子どもたちや若者への放射線防護教育にも携わっています（2頁、プロフィール参照）。



カーチャさんの来日を機に、「チェルノブイリとフクシマを結ぶ」取り組みをさらに進めようと、私たちは「チェルノブイリ30年・フクシマ5年-国際シンポジウム」実行委員会と協力し、原水禁大会前の8月1～3日に、カーチャさんとともに福島原発事故被災地の視察・交流を行いました。また大会後の10日に大阪で、「チェルノブイリとフクシマを結び、原発事故被害者の人権と補償を考える」講演・交流集会を開催しました。（講演内容は11-18頁。）

カーチャさんは、各地の交流や講演で、チェルノブイリ被災地で暮らしてきた自らの体験や「ラディミチ」の活動、特に汚染地での「放射線防護教育」について、試行錯誤しながら取り組んできた経験、具体的な手法や内容、自作のテキスト、写真などを紹介しながら熱心に語ってくれました。「チェルノブイリ30年の経験を、日本の方々に伝えたい。そしてフクシマに役立ててほしい。」という熱い思いが、ひしひしと伝わってきました。

カーチャさんの来日交流に各地でご協力下さった皆様、ありがとうございました。今後も原発事故被害者どうしの交流も含め「チェルノブイリとフクシマを結ぶ」取り組みを進めたいと思います。互いに学び、原発事故被害者の健康と生活守り、人権と補償を確立することをめざします。そして「チェルノブイリとフクシマを繰り返させない」ための取り組みを強めてゆきたいと思っています。

カーチャさん来日の経緯

今年は「チェルノブイリ事故30年で、『原水禁世界大会』にチェルノブイリ被災地からのゲストをぜひ招聘したいので、誰か推薦してもらえないだろうか」とのお話が、大会準備の中で原水禁事務局から「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」にありました。若い世代の人、これまで来日したことのない人、今後の交流にも積極的に取り組んでもらえそうな人…と思いを巡らし、今年の春の「国際シンポジウム」で来日されたロシアのNGO「ラディミチ」の創設者であるパーベルさんの「弟子」で、「ラディミチ」の「放射線情報センター」を担当しているカーチャさんのことが頭に浮かびました。早速、「救援関西」の運営会議で相談してカーチャを推薦することになり、今回の来日となりました。

カーチャさんと私は、2006年に初めて「ラディミチ」を訪問した時に知り合いました。当時、IAEAが「チェルノブイリ20年」の国際会議を開き、「チェルノブイリ被害はもう終わった」かのような報告書が出される中、「このままではチェルノブイリがなかったことにされてしまう…」と危機感を持ったパーベルさんが、「ラディミチ」の中に「放射線情報センター」という部門を新たに作り、そのセンターを任されたカーチャさんは、放射線被害に関する資料や本、ビデオや写真などの収集を始めていました。「チェルノブイリだけでなく、広島や長崎についての資料も集めたい」と熱心に資料収集をされている様子を見て「いつかカーチャが来日して、広島・長崎を訪問してもらえればいいな…」とっていましたので、彼女の来日を実現したことを嬉しく思います。

2011年に日本でフクシマ事故が起き、今ではカーチャさんの担当する「情報センター」にはフクシマ関連の資料も加わっています。資料だけでなく、実際にフクシマ事故の被災地の実情をカーチャさんに見てもらい、被災者とも交流してもらいたいと思い、福島視察・交流を企画しました。

今回、カーチャさんの通訳を担当して下さった、尾松亮さん(18-19頁、参照)は、フクシマ事故後に「チェルノブイリ法」の調査・研究をされ、日本で紹介をしてこられた若い研究者です。ノボジプコフにも調査に行かれ、「ラディミチ」取材された時にカーチャさんのインタビューもされたこともあります。ぜひカーチャさんの通訳をお願いしたいと依頼したところ、お忙しい中を快く引き受けて下さいました。10日間の滞在期間中、ずっと通訳とアテンドを献身的にして下さり、チェルノブイリ被災地の実情をよくご存知の尾松さんでなければできない、すばらしい通訳を(必要に応じて解説も)して下さいました。この場をお借りして、改めて、お礼申し上げたいと思います。(振津)

カーチャさんのプロフィール

ウクライナのチェルニゴフ州セメノフカ村の出身(セシウム137で3.7~18.5kBq/m²の汚染レベルのチェルノブイリ被災地)。1990年にロシアのノボジプコフ市(チェルノブイリ原発から約170km)の教育大学に進学。当時は、ノボジプコフが高汚染地(55.5kBq/m²以上)とは知らなかった。在学中の1991年に「チェルノブイリ法」が制定される。同年末にソ連崩壊。1993年から学生ボランティアとしてNGO「ラディミチ」(元代表パーベル・ブドビチェンコさんが、去る4月3日大阪で開催した「チェルノブイリ30年・フクシマ5年-国際シンポジウム」に参加した)の活動に参加。大学卒業後、故郷で教員として赴任の後、1998年にノボジプコフに戻り、「ラディミチ」の職員として、重度障がい者の教育などを担当。2006年からは「チェルノブイリ情報センター」を担当し、汚染地域で自らの健康を守るために、子どもたちや若者への放射線防護教育活動などに携わっている。また、スイスなどのNGOと子どもたちの文化交流活動なども担当。10代の息子を持つ母親。

報告～カーチャさんの福島訪問・交流

8月1日、カーチャさん来日。尾松さんと振津が成田に出迎え、そのまま電車でいわきに移動。いわき駅で佐藤龍彦さん（檜葉町から避難している）が出迎えて下さいました。

檜葉町の学校訪問

8月2日、佐藤さんに車で案内して頂き、双葉地区といわき市内の避難者仮設住宅を視察・訪問しました。

カーチャさんは元（小学校）教師で、今はNGOスタッフとして汚染地ノボジプロフで「放射線防護教育」も行っているの、福島では学校の先生ともぜひ交流してもらいたいと考え、カーチャさん訪問の準備に際し「福島県教組」に相談したところ、「檜葉町の学校に行ってみたらどうか」ということになり、檜葉中学校に勤務されている、県教組の日野先生が受入を担当して下さいました。

檜葉町では、元の檜葉中学校の場所に建てられた新しい校舎で、来年4月から小中学校を一緒に再開するとのこと。私たちが訪問した日は、日野さんたち檜葉町の小中学校の教職員は、生徒たちは夏休み中で授業はありませんでしたが、来春開校する新しい校舎で準備作業などをされているとのことでした。平日の勤務時間内の視察・訪問の受入なので、県教組の紹介とはいえ、「教育委員会を通して下さい」とのこと、まずは檜葉町教育委員会にご挨拶に行きました。教育総務課長の和田さんに対応して下さいました。

現在いわき市にある檜葉町の仮設小中学校



夕食を取り歓談しながら、避難地域と避難者の状況の概要を佐藤さんにお聞きしました。カーチャさんは、日本食に初挑戦。使い慣れない箸で刺身などを食べていました。



は、町内での学校再開に伴い、閉鎖される方針です。今年7月に町が就学対象者の保護者に行ったアンケートでは、回答した450人のうち、来年再開される小中学校への通学を希望しているのは79人で、7割の331人が「転校や区域外就学」をすると答えています。79人のうち半数の保護者はいわき市からの通学を希望しているとも報道されています。町はスクールバスなどの運行はしない方針で、子どもたちはいわき市の避難先から檜葉町まで電車で通学するのだそうです。子どもたちにとっても、教職員にとっても、いろんな意味で大変なことだと思いました。

新しい校舎の建物は、明るく近代的な雰囲気、設備もとても新しいようでした。校庭に設置された線量計の表示は、 $0.124 \mu\text{Sv/h}$ でした。まだ机も椅子もない職員室で、校長先生がカーチャさんを教職員の方々に紹介して下さいました。その後、日野先生が校内を案内して下り、カーチャさんは最新の設備の整った日本の学校を興味深く見学していました。昼休みを利用しての視察ということで時間が限られ、昼休み休憩中の先生方とじっくり

りお話することも難しく、「フクシマの先生たちにチェルノブイリの被災地での放射線教育の経験を伝えたい」と意気込んでいたカーチャさんは、ちょっと残念がっていました。このままで帰るのはもったいない…と、（日野先生は「昼休みなし」になってしまい申し訳なかったですが）視察の最期に短時間だけ図書室に座って、日野先生だけには、「ラディミチ」で実践している「放射線防護教育」について、冊子（先生向けに教育法などが解説してある）などを見せて、カーチャが手短

「避難解除」後の檜葉町

檜葉町は、昨年9月に避難指示が解除されましたが、帰還している町民は未だ10%に達しません。その理由は様々なようです。放射能汚染への不安もあるでしょう。町内には除染廃棄物があちこちに山積みされたままです。土地の所有者がわからずに、除染のできない所もあります。全体として空間線量率は下がってきているものの、ホットスポットも散在し、特に山林や北部の地域は未だ線量もかなり高いです。また、未だ事故収束には至らない第一原発から20km圏内ですし、第二原発についても東電や国は未だ廃炉にするとはいいません。住居の解体・立て替えがなかなか進まない、隣近所が戻ってこない、若い人々が戻ってこない、医療の問題（休日診療、入院治療などの未整備）、商店やインフラなどの整備の問題、雇用の問題、農業などの生業再開のメドが立たない、指定廃棄物の最終処分場の問題、等々…課題は山積みです。

檜葉町で聞いた広野町の小学校の様子

この日は、檜葉町議員の猪狩守さん宅も訪問させて頂きました。檜葉町議会は、震災直後は町役場の避難先になった会津で1年半、その後はいわき市の明星大学で場所を借りて開催されていたとのこと。昨年9月の檜葉町の避難解除の後、町内で議会が開けるようになり、猪狩さんは檜葉町のご自宅に戻って暮らしておられます。木の香りのする、とても広くて陽当たりのよい、快適な日本家屋にお住まいです。猪狩さんの奥様は、「家に

に説明をしました。日野先生は「このような教育を自分達もやりたいのだが…」と、感想を述べられていました。福島では「放射線教育」として学校のカリキュラムに組み込まれているのは、年間にたった2時間だそうです。事故後、放射能汚染や避難など、これまでにない課題も加わり、教職員の日々の業務も多様化し加重になった教育現場では、日々「闘う」ことなしには放射線教育の実践もなかなか思うようにできない…という困難な雰囲気を感じました。

民の皆さんにとっては、5年以上にわたる避難生活を終わらせたいが、帰還しても事故前の故郷の生活とはほど遠い現実があります。それはいくら賠償金を積まれても、取り返しがつかないのです。それぞれの事情の中で、それぞれに悩みながら、町民は「選択」を迫られているようです。

旧避難指示区域では、国は「年間20mSv以下になれば帰還できる」として、「復興」のための補助金と引き換えに被災自治体に「避難解除」を迫り、自治体もそれを受け入れざるを得ず、課題を抱えたまま次々と「避難解除」が進められています。国策で進めた原発で重大事故を起こし、放射能汚染で人々の故郷を奪った…そのことの責任を認めることもなく、「事故は終わった」かのように「復興」を振りかざし、現地の実情を無視して一方的に帰還を促す国のやり方に、悔しさと憤りを感じます。

帰りたくて仕方なかった。『ひとりで帰る』とよく夫と喧嘩していました。」と言われていました。前述のような様々な問題がある一方で、他の自治体にある狭い仮設住宅や借り上げ住宅での避難生活でなく、檜葉の我家に帰りたいという住民、特に年配の方々の気持ちもわかるような気がしました。この日は、カーチャさんが訪問するというので、隣の広野町の小学校教員をされている猪狩さんの娘さんの香奈さんが、檜葉町の実家に来て下

さっていて、ご両親と一緒に私たちを迎えて下さいました。カーチャさんは、教員をしている香奈さんに「私たち、同僚ね！」と、会えたことをとても喜んでいました。

広野町は元々「避難指示」はなく「緊急時避難準備区域」（緊急時に屋内退避、または避難）に指定され、それも2011年8月末に解除されました。小学校は事故後1年余は、いわき市内の仮設校舎で、そして2012年8月には町内で再開しました。現在、小学生生徒数は約140人。広野の自宅には戻らずに仮設や借り上げに住んでいる子どもいて、いわきからスクールバスで通ってきているそうです。避難先に住んでいる家庭は、先が見えず、親の気持ちも不安定になりがちで、それが子どもたちの気持ちや行動に出て、どこか不安定になることもあるとのこと。広野では、来年3月末以降は、仮設住宅や住宅支援の延長が

カーチャさん「放射線防護教育」について語る

「私たちは30年経っても、放射能のリスクを教えています。福島でそのような教育はできますか。」とカーチャさんが香奈さんに質問したところ、「福島では、年間2時間しか放射線教育の枠がない」との返答にカーチャさんも驚いていました。カーチャさんは、「チェルノブイリでも30年を振り返ると、先生たちもパニックになったり、どうしていいかわからない時期もあった。5年後に『チェルノブイリ法』ができて、あるレベルを超えた地域は『汚染地域』に指定され、そこでの対策も決まった。私の出身のウクラ

ありません。（避難指示の出た7町村では、2018年末まで延長あり。）広野に家が残っている家庭もあれば、壊してしまった家庭もある。ほとんどの家庭は戻ってくるつもりのように、家を建て始めているが。避難指示区域ではないので、戻ってきたいと言っても壊してしまった家を建て直す財政的支援はどこからもない。子どもの生活に関わることなのだが、各家庭の問題なので、教師が関わるのは難しい。一方、子どもたちの教育現場の地盤はまだ整っていないにもかかわらず、町行政は震災前の状態に戻そうとする傾向があり、行事だけは「前どおりやるように」と、一方的に指示が降りてくる。…等々、避難区域だった檜葉町とはまた違った条件での、広野町の学校の困難な様子も少しお聞きすることができました。

イナのセミノフカの町は汚染地域としては最も低い区分(3.7~18.5kBq/m²)だったが、住民全員が検診を年1回受け(但し、甲状腺の超音波検査は必須ではなかったそうです)、小額の補償金が支給された。子どもたちには学校給食は無料だったし、汚染していない地域に20日くらいの保養にも行けた。子どもだけでなく、事故処理作業者についても、別に補償があった。ソ連時代から、医療は無料だったが、チェルノブイリの被災者は、『被ばくと関係がある健康障害がある』と認められれば、特別の検診などが受けられた。

今暮らしているノボジプコフは、汚染がとても高いところもあって、平均55.5kBq/m²を超える。148kBq/m²を超えると立ち入り禁止になり、町の周辺の集落の中には、そのような高汚染のために強制退避によって無くなった村もある。ノボジプコフの検診はセミノフカのように汚染レベルの低い地域よりは充実している。必ずホールボディカウンターの検査と、甲状腺エコー検査も行う。子どもだけでなく毎年、大人も検診を受けることになっている。農産物も、必ず衛生局で放射能汚



染を測定しなければならない。」と、チェルノブイリ被災地の体験を話してくれました。また、「ラディミチ」で行っている保養や、子どもたちの「放射線防護教育」の話もしてくれました。

小学校教師の香奈さんは、カーチャさんの「放射線防護教育」の話に興味と親しみを持ったようで、最期には、「一度ロシアに行

放射能汚染と津波被害を目の当たりにして
午後には国道6号線を車で北上し、まだ避難解除が行われていない富岡（夜ノ森）、大熊、双葉を通過して、浪江（請戸の津波被害や町役場）を視察し、高速でいわきに戻りました。荒れ果てた田畑や、人が住む事のできない家々…その光景は、カーチャさんにとって

避難者仮設での夕食

夜は、いわき市内の避難者仮設住宅で、佐藤さんのお母さん（アキさん）の手料理の夕食をいただきながら談話。手先の器用なアキさんが作った様々な手芸品、ご家族の写真な

浪江町長を表敬訪問

8月3日は、早朝にいわきを出発し、二本松市にある浪江町二本松事務所（仮町役場）で、馬場町長を表敬訪問しました。町長からは浪江町の現状の説明がありました。昨年、政府から帰還困難区域以外は避難指示解除をするとの方針が伝えられ、町としても、インフラ（上下水道など）、生活基盤（病院、介護施設）、除染、放射線対策（ダムからの農業用水や、上下水道のモニタリングなど）の4つのポイントについて検討しているとのことのお話でした。「4つのポイントが満たされれば、町民は帰還すべきだと思いますか。」とのカーチャさんの問いに、「私どもの目標は、年間1mSv以下です。除染によってできるかぎりそ

福島市の中学校教員と会談

その後、福島市に移動。市内の中学校教師で、県教組の放射線教育委員会のメンバーの大槻知恵子さんと昼食を取りながら会談。福島では2時間しか放射線教育がされないことをまた聞き、カーチャさんはあきれていまし

てみたい…」と言われていました。ただ、広野の学校の生徒の中には、東電社員の子どもさんもいて、「東電の責任」につながるような話しになると、子どもたちに配慮が必要で、がなかなか原発事故の被害、放射能の話しを取り上げにくい難しさがあるとも言われていました。

たようです。浪江の請戸の津波被害の現場に立ち、「これまで写真で見えていたが、実際に自分の目で見て、また原発事故のために多くの人々が助けられなかったことを聞いて、とても胸が痛んだ。」と。後で感想を述べていました。

どを見せていただきながら、避難生活の様子をお聞きしました。暖かいおもてなしに、カーチャさんもとてもくつろいでいた様子でした。

のレベルまで下げるということが、必要最小限の条件だと考えています。」と町長さんは答えておられました。また、「放射線対策の中では、子どもに対する放射線防護教育をされる予定はありますか。」との質問には、「放射線に関するセミナーなども含まれる」と町長さんは答えておられました。

カーチャさんは、自分が実践している放射線防護教育について話し、汚染地域では単なる知識でなく、リスクを知った上でいかに健康な生活を送るための実践的な習慣を身につけることが大切だと強調し、今後も情報交換と交流をしましよと話していました。

た。大槻さんは、カーチャさんのノボジプロフでの「放射線防護教育」の実践に関心をもたれ、今後も情報交換しましよということになりました。また、「そのような教育をして『風評被害を煽っている』というような批

判はされないのですか」と問われましたが、ロシア語には「風評被害」に対応する訳語がないようで、ここでもフクシマとチェルノブイリの違いを感じさせられました。(18頁、尾松さんの寄稿をご参照下さい。)

その後、8月9日に長崎で(高校生平和大使の付き添いで来られていた)大槻さんに再

「きらり健康生協」訪問

午後は、福島市の「きらり健康生協」本部を訪問、常務理事の橋本一弘さんから、医療生協の日常的な地域医療や介護、福祉の取り組みについて、また食品の放射能測定、健康

「3a(安心、安全、アクション)郡山」を訪問

最期に、福島から東京に戻る新幹線を途中下車して、郡山市のお母さんたちの団体「3a(安心、安全、アクション)郡山」の事務所を訪問し、代表の野口時子さんから「3a」の活動についてお聞きしました。私は、今年の3月にノボジプコフのお母さんの団体から頂いた、こどもの粘度細工の絵を「3a」に贈呈したこともあり、ノボジプコフとフクシマのお母さんたちの交流につながればと、短時間でもカーチャにぜひ立ち寄ってもらいたかったのです。

野口さんは、ちょうど彼女の娘さんも含む郡山の高校生数人と一緒に、スイスで開催された高校生の国際交流の合宿に参加して帰ってこられたところでした。環境問題をテーマにした創作劇(?)に、ベラルーシや欧州の国々の高校生とともに取り組んだ時の様子な

会し、大槻さんは、福島県教組が作成した放射線教育のリーフレットや書籍、福島市発行の放射線教育の冊子などを、カーチャに資料として手渡してくれました。カーチャさんは「放射線情報センター」の資料に加えたいとのことでした。

相談、甲状腺検査(県民健康調査の検診機関として)など、震災と原発事故後の医療生協の取り組み、等々について説明を受け、カーチャも熱心に聞き入っていました。



どを話してくれました。カーチャさんも、スイスの別の団体による子どもたちの国際交流活動に参加していることもあり、野口さんたちの活動にも関心を持ったようで、今後も交流したいと言われていました。

ほんとに「駆け足」の福島訪問でしたが、いろんな方々に会って頂くことができました。この繋がりを大切にして、発展させていきたいと思えます。特に、学校の教員の方々との出会いは、カーチャさんがとても望んでいたことでしたし、少人数、短時間で議論は深まりませんが、お互いに「刺激」になって、とにかく今後の交流につながるきっかけになったのではないかと思います。

(振津かつみ)



広島、長崎の原水禁大会への参加



米国や韓国からの海外代表とともに広島の原爆慰霊碑に献花。（8月4日）



広島大会の開会集会へ向けて「平和行進」に参加。（8月4日）



分科会「世界のヒバクシャとの連帯」で講演。（8月5日広島、8日長崎）



広島の海外代表歓迎レセプションで。（8月5日）



長崎の閉会集会後、爆心地公園に向けて行進。（8月9日）



「被爆二世の会」が取り組む原爆遺構巡りに参加。浦上天主堂前で。（8月8日）

8月7日原水禁世界大会・長崎大会の開会集会でのカーチャさんのスピーチ

参加者の皆様 こんにちは。

エカテリーナ・ブイコワと申します。

私はここで、どんな集団、どんな組織を代表しているのか。

第一に、私はロシアの西のはずれブリャンスク州から来ました。住民の多くが、チェルノブイリ原発事故による汚染の被害に今も苦しんでおり、私もその一人です。

第二に、私はウクライナ出身です。私の家族も、幼馴染の友人たちも皆ウクライナにいます。ウクライナ東部ドネツクやルガンスクでの紛争の影響で、みな苦しんでいます。

第三に、市民団体「ラジミチー

チェルノブイリの子供たちへ」のメンバーとして活動しています。

私は25年間、ロシア・ブリャンスク州のノボズィプコフという町に住んでいます。この町はチェルノブイリ原発から180km離れていますが、ロシアで最も高いレベルの汚染を受けた地域です。町とその周辺地区には、比較的汚染度の低い地域もあれば、人が住めないほど汚染されたところもあります。

でも、絶望したり、ここで生きていくことはできないと嘆いたりしてばかりはいられません、私たちから未来と美しい自然を奪った政府や、原子力に怒りを感じるのは当然です。でも怒っている間にも、私たちの汚染地域での生活は続き、子どもたちは生まれ、ここで育っていくのです。政府が何かしてくれるのを待つだけでなく、私たちは自らこの押し付けられたリスクを最小限に抑える取り組みをしてきました。

私たちの非営利団体では、住民、特に子供たちが汚染の影響から身を守り、健康な生活を送れるよう、いくつもの長期プロジェクトを実施しています。重要なプロジェクトの例を挙げたいと思います。

- ・ 甲状腺診断室
- ・ 健康な生活習慣を教える青少年センター
- ・ 知的障がい児、身体障がい児のための教室
- ・ 汚染地域の子供たちを受け入れ、20日間のサマーキャンプを実施する保養施設「ノボ・キャンプ」
- ・ コンピューター講習クラブ
- ・ 原子力被害の実態や放射線の影響についての情報教育に取り組むチェルノブイリ情報センター などです。

また、住民を対象に汚染の影響から身を守って生きていく方法についての講習会や教育プログラムを実施しています。

私たちの経験が、フクシマ第一原発事故被災地の方々のために役立つのではないかと願っています。だから私たちの経験を伝えたいと思います。



私たちそれぞれが、住み慣れた場所で生きる権利、汚染のない自然環境、健康で安全な生活、平和の中で子供を産み育てる権利を持っています。そして私たちには、子どもたち、孫たち、子孫の未来を守る義務があります。

チェルノブイリ被災者、福島第一原発事故被災者、そして世界中のヒバクシャにとって、人生は悲劇が起こる前と、その後の人生、二つに切り裂かれてしまいました。悲劇が起こる以前の生活は、どれだけの光に満ち溢れていたことでしょうか。今になると特に強くそれを思います。時間がたつとともに、より多くのことがわかってきます。

チェルノブイリ原発のカタストロフィは、私たちから明るい未来を永久に奪いました。搾りたてのミルクを飲むことはできなくなりました。基準値を超えて汚染されたミルクが多いからです。野生のキノコやキイチゴ、野生動物や野鳥の肉、湖の魚。自然の恵みに支えられた地域の昔からの食生活が、できなくなったのです。いつも、どうやって汚染の少ない食品を買うか考えています。川や森にいくと、汚染の影響が心配になります。健康診断を受けるとき、医師から死刑宣告でも待つかのようにおびえてしまいます。私の国では、こんな状況があと何十年も続くのです。この気の滅入るような運命が、私たちの背負った「十字架」。チェルノブイリの十字架なのです。

先日福島県の、旧避難指示区域、津波の被害を受けた地域を訪問しました。学校の先生方が自信を無くした姿、だれも住んでいない家などを見て、チェルノブイリ被災地の風景と重なりました。広島平和祈念資料館を訪問した時の強く重い印象が、いまでも頭から離れません。世界中のヒバクシャ、そして福島第一原発事故による被害者の悲しみは、私自身の悲しみでもあります。

日本の皆様！私たちは、チェルノブイリも、フクシマも、核によるどんな被害も、二度と繰り返されることのないよう、できることすべてやりましょう。チェルノブイリ被災者、福島原発事故の被害を受けた方々、そしてヒロシマ・ナガサキをはじめ、世界のヒバクシャの皆様。私たちは、どこであれ次の核災害が起こるようなことを許してはなりません。

この貴重な国際会議に参加する機会をいただき、原水禁の皆様、心から感謝いたします。ご清聴ありがとうございました。

(翻訳：尾松亮)



8.10 大阪集会 カーチャさん講演

こんにちは

今日の集会にご参加いただきましてありがとうございます。来ていただいて本当に嬉しく思います。私はエカテリーナ・ヴィコワと申します。

<フクシマ事故が来日のきっかけ>

私はロシアの西の外れにあるブリャンスク州のさらに一番西の外れのノボジブコフという町から来ました。日本に来れたのは大変嬉しいことですが、そのきっかけは喜ばしいことではありません。なぜならチェルノブイリ原発事故同様のカタストロフィが福島で起こ



<事故当時、情報は届かず>

チェルノブイリ原発事故が起こった当時、私は11歳でした。ウクライナのチェルニゴフ州セメノフカ町が私の故郷ですが、そこはチェルノブイリ原発からは250km位離れているかと思っています。事故が起こった時、初めてチェルノブイリという名前を知りました。チェルノブイリ原発事故が起こった次の日、セメノフカ町の生活は何も変わりませんでした。いつもと同じように過ごし、子供たちは学校に行きました。その日の夜になって、近隣の大人たちが、事故が起こったその日、窓枠がすごくカタカタ揺れたとか、地震が起きたんじゃないかという風に言っていました。また

<汚染地と知らずにノボジブコフへ>

15歳一学校の9年生、日本で言えば中学校3年生一になって、進路としては義務教育が終わるので、希望があれば中等専門学校に入学する選択肢がありました。私は母の勧めで、教員になるためにノボジブコフという町の教員養成校に入学しました。そこは私の故郷か

ってしまったからです。日本には前から来たいと思っていました。子どもの頃から日本に関心がありました。今思い出せば、まだソビエト時代に私はウクライナの学校で勉強をしていました。85年位だったと思いますが、学校で折鶴を折って日本に送るという取り組みをしたことがあります。それは様々な核災害・核悲劇について学ぶ授業で、ヒロシマ・ナガサキのこともそこで学びました。その頃から日本にとっても関心があって日本の方々のメンタリティ、文化、日本の方々がどのように生活しているのか興味があって日本に来たかった。でも日本に来たいという昔からの夢が叶うきっかけが、こんなフクシマの事故だったということにすごく複雑な思いをしています。

ある人から、テレビでニュース速報が流れて、チェルノブイリ原発で何か問題が起こったけど、ゴルバチョフはアンダーコントロールで、状況は心配することはないという情報だけ聞いたという話を聞きました。事故から2~3週間経って、私の母が言ったんですけど、役人たちが自分の子どもたちだけ南のより離れた所に避難させ始めたというのを聞きました。ただそれ以外には生活は何らいつもと変わることもなく、チェルノブイリ事故について情報も届かず、放射能とは何か、どれくらい危険なのか、どれくらい放射線量が上がっているのか、町には全く情報はありませんでした。

ら75km程しか離れていません。その時、母はノボジブコフが放射能汚染地域だということを知りませんでした。ノボジブコフは比較的汚染濃度の低い所と高い所があり、3万7000ベクレル/m²を少し上回る所から140万ベクレル/m²を超えて人の住めない場所までいろ

んな汚染状況があります。私の母も、またウクライナから勉強のためにノボジブコフの教員養成校に送り出した他の親も、ノボジブコフ

＜ノボジブコフで驚いたこと＞

ノボジブコフで勉強をするようになって最初驚いたのは、森や野原一体育の授業で森や野原を走ったりする授業があったのですが一に立ち入り禁止の放射線のマークの付いた札が立っていたことです。またお店に行くと、退去対象地域の住民用の特別のコーナーが設けられていて、食品がより安い値段で売られていました。私のような外から来た人たちは、その特別なコーナーで買い物をすることができなかつた。なんでそうなのか最初の頃は分からなかつた。それで体育の授業で森に行った時に、先生になぜ立て札が立っているのかと聞くと「たいしたことはないから気にするな」という話でした。「生活安全の基礎」という科目があつて、そこでは応急手当や避難訓練などの民間のサバイバルの技法を教えますが、その中に放射線の特性というのが含まれていて、その担当のシゾフ先生だけが生徒に放射能とは何なのか、どれだけ放射能汚染地域に住んでいると危険なのか話してくれました。ただ私たちは若かつたので、見えもしない、匂いもしない、触ることもできない放射能とは何なのか分からず、シゾフ先生の

＜「ラジミチ」に参加＞

この教員養成校で学んでいた時に私は「ラジミチ」という学生サークルに参加するようになりました。このラジミチは、ここにも来たことのあるパーベル・ブドビチェンコさんが事故の翌年、1987年に創立した学生サークルで、当初は教師でもあつたパーベルさんと歴史のテーマで学習するサークルでした。そのあと私が参加する頃には社会的弱者に社会的支援をすることに力をいれていました。避難して人気の無くなつた村に残つた身寄りのないお年寄りの支援や、障がい児、孤児院に行つて身寄りのない子どもたちに支援する取り組み等を行つていました。そしてこの「ラ

フの汚染状況については情報を持っていませんでした。

話を本気で聞くことはできませんでした。みんな元気だったので走り回ったり、遊びまわり、放射能のことなんか気にしていませんでした。

私がおのあと驚いたのは、1992年か93年頃だつたと思いますが、この教員養成校で特に優秀で人気の高かつた先生方が次々と町を去つていったことです。そのあと後任の先生がやってきましたが、去つていった先生に比べて教え方も悪かつたし、私たちもなかなか馴染むことができなかつた。そして去つていく好きだつた優秀な先生方に、なんで去つて行くのかと聞いても彼らは本当の理由を説明してくれませんでした。ただブリャンスク州の州都やモスクワ、ペテルブルグで仕事が見つかつたからというような話で本当の理由は話してはくれませんでした。今から思えば自分たちが汚染地域から出ていくことで学生たちがパニックになるのを防ごうとしたのか、それとも上層部から口止めされていたのか、ソ連時代は秘密情報で語つてはいけなかつたということもありましたからそれを恐れたのかも知れません。

「ラジミチ」での社会的活動の規模がだんだん大きくなり、支援を必要とする人の数も増え、支援に参加したいというボランティアも多くなりました。そこで事業を拡大するために財政的支援も必要になり、ブリャンスク州の大きな町に行つて支援してくれる人を探したりモスクワに行つて資金援助をしてくれる組織を探したりする取り組みも行つたようになりました。最終的に資金援助や積極的に支援してくれるようになったのはロシア国内の団体ではなく、ドイツの市民団体「プロオスト」でした。

〔地域の課題を調査—長期支援プロジェクトを〕

この「プロオスト」というドイツの団体と協力して、現実に地域にある課題を理解するためにブリュンクス州のいろんな地域を調べて回った時に、私たちは問題の大きさを再確認しました。汚染された地域のあるブリュンクス州には障がい児を抱えた家庭も多かったし、また避難・移住が義務づけられ若い人が出て行った後、その地域に残り続ける身寄りのないお年寄りも多かった。そして孤児院で特別な支援を必要とする身寄りのない子ども

〔脳性小児麻痺の子どもたちのリハビリセンター〕

たとえばこの地域の中で特に深刻な問題となっていたのは脳性小児麻痺の子どもたちへの支援でした。脳性小児麻痺の子どもがいても、ちゃんとした治療法がない、ちゃんとしたリハビリを受けられる状況がこの地域にないということがありました。私たちは「ラジ

〔障がい児学級—共に育つ〕

もう一つの社会的プロジェクトとして障がい児学級を始めました。知的障がい者も身体障がい者も受け入れていますが、その事業をなぜ始めたかという、この地域では障害を抱えた子供たちは社会から切り離されている状況があったからです。学校では障がいを抱えた子どもたちを受け入れてくれない所が多く、そうすると彼らの両親以外は誰も彼らに注意を向けることのない、社会から切り離された状況がありました。だから障がいを抱えた子どもたちが誰でも通って来れるような教室を開いたのです。「ラジミチ」の職員は教員免許を持ち教員経験を持つ人が多く、私もその一人ですが、とはいえ障がい児教育の専門コースを受けたことはありませんでした。だからドイツの専門家を招いて講習を受けたり、ドイツのセミナーに参加して障がい児教育のメソッドを私たちも学びました。この障がい児教育で私たちが力を入れているのは、障がいを抱えた子どもたちが生活上の自立、自分で身の回りのことができる習慣を身につけること、またコミュニケーションの習慣をつけて

たち、また身寄りがあっても親のネグレクトによってちゃんとしたケアを受けていない子どもたちの状況も明らかになってきたからです。そしてこれらの社会問題に対応し本当に支援を必要とする人たちを助けるために、私たちはドイツのパートナーと協力して長期の社会支援プロジェクトを幾つか始めました。そしてその幾つかは今に至るまで続いています。

ミチ」の中に脳性麻痺の子どもたちのためのリハビリ施設を作りました。とはいえ、リハビリを行う専門家が地域にはいませんから、ドイツから医師などを呼んで、特に薬を使わないでリハビリをするボイタ治療法などを学び、実践するようになりました。



健常児と障がい児の境目なく交流できる機会を作ることです。なぜならそういう機会を作らないと、健常児が障がいを持った子どもたちを仲間に入れてくれない、切り離された状態が続いていたからです。そして障がいを持っている自分と同年代の子どもと関わることによって健常児も成長していきました。そうやって助けを必要とする仲間を助けるとか、様々な特徴を持った仲間と一緒に生きるということを、障害を持っていない子どもたちも学んでいきました。

〔甲状腺診断室—情報教育も〕

またこの頃には住民の多くが甲状腺の問題を抱えていることも明らかになっていますので、甲状腺の診断を定期的に行う甲状腺診断センターを開設しました。この時もドイツのパートナーが協力してくれてこの事業が始まりました。少し話を前に戻すと、私の参加している「ラジミチ」は学生サークルから始まりました。そして、その行っている社会活動が認められ、拡大の必要性が分かってくるにつれて、1997年には「ラジミチ」として建物一もともと幼稚園だった2階建ての建物一を市から提供してもらって、そこを拠点に活動することになりました。そのおかげでいろいろなプロジェクトを同時進行で行うことがで

〔非汚染地域で保養キャンプ（ノボキャンプ）〕

その当時、私たちの住んでいるブリュッセル州でも多くの市民団体やグループが子どもたちを保養のために海外に積極的に送り出していました。20日間ほど海外の汚染されていない地域に子どもたちを保養に連れ出すことによって、子どもたちに健康的な影響を与える取り組みでした。でも外国に行くツアーに参加できる子どもも、子どもを送り出すことのできる家族の数も限られています。しかも1年間に20日間だけですから、それで十分に保養の効果があるとは思えません。だから私たち「ラジミチ」では必ずしも外国でなくてもいいのではないか、同じブリュッセル州の中に汚染されていない地域もあるのだから、そこで保養所を開設して、子どもたちのために保養のキャンプを行おうという取り組みを行うようになりました。

夏の間中、私たちは何回かに分けて保養キャンプを行います。ただ同じ内容のキャンプをするのではなくて、それぞれの回にそれぞれのテーマ毎に子どもたちを集めてキャンプを行っています。例えば、4つほど保養キャンプのテーマがあるのですが、1つは芸術キャンプ、表現教育にかかわるものです。実際にプロの画家などを呼んで一緒に絵を描く、また絵の描き方をプロの人から学んで、子ど

きるようになりました。

甲状腺診断室の話に戻りますが、甲状腺診断室では誰でも自由に甲状腺診断を受けられます。今この診断室に登録している住民は1万6000人です。その1万6000人のうちの70%は何らかの甲状腺の問題を抱えていると分かっています。その一部は甲状腺ガンになった人もいます。住民に甲状腺診断の機会を提供するだけではなく、正しい病気の予防法、また甲状腺がどんな機能を持っていて放射線がどうやって甲状腺に影響を及ぼすのか正しい知識を与えることも重要だということで、甲状腺診断室では住民や訪れる人に対して情報教育も行っています。

もたちは保養所の近くの柵を塗ってみたりとか、何か像を作ってみたりする。2つ目のテーマはスポーツキャンプ。サッカーやバレーボール、バスケットボールなどの様々な競技の試合を行ったりして、アクティブな生活を送ります。そのキャンプを通じて子どもたちは自分の好きな競技を見つけ、帰ってからもより本格的に競技に取り組みます。3つ目は健常児と障がいを抱えた子どもたちが一緒に共同生活する中で、健常児からすれば違った特性を持った子どもたちがいるのに気づき、その子どもたちとどうやって共同生活していくのかを考え、優しさなどを身に付けていきます。障がいを抱えた子どもたちからみても、普段あまり関わることのない同世代の健常児と生活することによってよい刺激を受けたりします。4つ目がコンピューター講習合宿です。この講習の中で5つくらいの分科会を作って、デザインやフォトショップを勉強したり、またホームページのサイトの開設など様々なテーマで学びます。このコンピューター学習に参加した子どもたちはここで得た知識を基にこの学習が終わってもそれぞれ関心のあるプログラムを作成したり、よりコンピューターの知識に習熟していきます。

〔国際保養キャンプ学生ボランティアとの協力が大切〕

このノボ・キャンプは国際保養合宿と私たちは呼んでいます。なぜならこの保養に外国からの子どもたちも受け入れているからです。ドイツ、スイス、フランス、イタリア等様々な各国から参加しています。勿論ベラルーシ、ウクライナなどの近隣国からも参加しています。私たちがこのノボ・キャンプや他の社会支援プログラムを行うにあたって注意するのは、学生ボランティアとの協力です。大学生や高校生に参加してもらい、彼らが自主的に活動に関わっていくことによって自己実現できるようになっていくこと、多くの学生が

〔州内でもコンピューター講習〕

スイスの大使館の協力のおかげで、ブリヤンスク州の11か所で「ラジミチ」はコンピューター講習所を開設し、運営することができるようになりました。ブリヤンスク州の多くの地域はチェルノブイリ事故で放射能汚染を受けました。その影響で経済的発展も難しく全般的にとっても貧しい地域です。特に村落や町から離れた所ではコンピューターがない家庭も珍しくありません。すると子どもたちはインターネットを見て情報を得る機会もない

〔国際交流で考え方が変わる〕

ロシア全体を含めて、我々の地域の子どもたちが抱えているメンタリティ上の問題があります。それは我々の地域では広く外国人と交流する機会が少ないということです。子どもたちは外国人と交流する機会がない中で閉ざされた世界観を持つような傾向があります。自分たちが慣れ親しんだ価値観だけが正しいと思い込んでしまうようになり、それがあつ種の寛容さ、違つた考え方や違つた人たちを受け入れる寛容さを失わさせてしまう原因でもあります。ペスタロッツ村との交流が私たちにとつて大変良かったのは、ペスタロッツ村

〔青少年センター子どもたちの居場所を作る〕

また汚染地域でもあるブリヤンスク州ではストリート・チルドレンが問題になってきました。子ども非行の問題が深刻になってきました。例えば両親が犯罪を犯し刑務所にいて面倒を看てもらえないこどもたち。また両親がいるけれど夜遅くまで働いている、或いはアルコール中毒になっていることによつて、ネグレクトの問題があり、面

子どもとの教育活動に関心がありますが、仮に彼らが将来教育に関わらなかつたとしても、ここで培つた知識とか企画力教育とかが、別の分野で何らかの形で生きてくることが重要です。ボランティアを受け入れるにあつて私たちが気を使っているのは、彼らが本当に居心地の良い環境でボランティア活動ができることです。そして自分たちの仲間を活動を通じて見つけられるようにしています。この学生ボランティアは夏休みの間中保養所に来て何回かに分けたキャンプに参加し、経験を積んでいます。

わけです。ですから「ラジミチ」はコンピュータークラブを農村や村落の学校などに開設して、希望する子供は誰でもコンピューター講習を受けてインターネットを見られる機会を作っています。そして私たちが行っているこういった取り組みは多くの国内国外の団体、組織にも関心を持ってもらうようになりました。ある時、スイスのペスタロッツ村の市民団体がとても関心を持ってくれて私たちと協力関係を持つようになりました。

が毎年20日間ほどロシアからの子ども、ブリヤンスク州の子どもを受け入れてくれて、そこにスイスやドイツ、ウクライナの子どもなども参加して国際交流の機会ができます。またロシア国内とは違つて西洋風の、ある意味スイス風のプログラムがあるために、そこに参加した子供たちは今までの当たり前だと思つていた自分の考え方にカルチャーショックを受けて帰つてきます。自分たちの考え方だけが正しいわけではなかつたと気づきます。

倒を看てもらえない子どもたち。すると子どもたちは誰も面倒を看てくれませんから、タバコを吸い始めたり、また麻薬に手を染めてしまうこともあります。こういった社会的な退廃的な環境で子どもたちが育つてしまう問題があり、その一つの解決策として「ラジミチ」は青少年センターを開設しました。この青少年センターで何をやってい

るかという、学校が終わった後で子どもたちは家に帰っても両親はいない。どこにも居場所がなく、そういった非行に走ってしまうことが多いわけですから子どもたちの居場所作りです。仲間とお茶を飲んだり、スポーツの好きな子どもは仲間とスポーツに取り組んだり、トランプなどいろいろなゲームをすることもできます。また必ず担当

〔事故後 20 年経ち情報発信の必要性を痛感—情報センターの開設〕

今私が一番興味をもって取り組んでいるのは、チェルノブイリ情報センターというプロジェクトです。2005 年頃から「ラジミチ」の創設者であるパーベルさんが、いろんな学会や会議などに参加する中ですごく大きな問題意識を持ちました。それはチェルノブイリ情報センターを開設し、いろいろ集めていた事故当時の写真や資料を保存する、証人が生きていうちに証言を記録して、チェルノブイリ情報センターから情報発信する必要があると考えました。なぜならチェルノブイリ情報センターが開設した 2005 年はチェルノブイリ事故から 20 年経ち、世界でいろんなカタストロフィが起こる中でチェルノブイリのテーマが忘れられつ

〔大人たちに情報教育—大切なコーディネーターの役割〕

この地域の大人たちが悲観的な心情になったり大きなストレスを抱えていて、それが弱い子どもたちに影響を与え、子どもたちへの心理的悪影響から、非行の問題であったり、親に面倒を看てもらえないことからタバコを吸ったり、麻薬に手を染めるといった問題がありました。その根本原因を探ると、住民たちが対策も分からないまま、ただただこの地域に住んでいたら自分たちの健康が害されるのではないかと、健康に不安を抱えていること、またこの地域の汚染状況や汚染のリスクに対してどんな防護策をとればいいのか正確な情報を持っていないという心理的な圧力の中で生きていくことに、おおもとの原因があるということが私たちには分かってきました。私たちは幾つか重要なテーマを立ててそれぞれについて学者や専門家を招いて交流して情報をまとめていきました。例えばチェルノブイリ事故の農業に与えた問題、チェルノブイリ事故と健康の問題、チェルノブイリ事故と若い世代、チェルノブイリ事故と社会、チェルノブイリ事故と放射線とその影響、放射線

の職員、教育者がいますのでその人と一緒に絵を描く等、取り組むべき事、居場所を提供しています。今、青少年センターに来ることを希望する子供には誰にも門を開けています。平日の 12 時から夜 9 時までオープンしています。月に 1 回は大きなイベントをして、その時は大体 100 人くらい集まります。

つあるという危機感を持ったからです。また政府にもチェルノブイリ事故から 20 年経ったからこのテーマに力を入れなくてもいいという姿勢が見えたからです。だからこそ資料を保存して語り継いでいくような情報センターの必要性を私たちは実感してこのプロジェクトを始めました。このチェルノブイリ情報センターを開設した 2005 年頃には私たちは各国の助成金に応募するノウハウを持っており、この助成金に応募することによって 1 年間、2 年間という長期的プログラムに支援を得ることができるようになりました。スイスの大使館から資金援助を得て、スタートすることができました。

と健康の問題などテーマについて資料を集め専門家と交流しました。

このチェルノブイリ情報センターの活動をやり始めた当初も私は放射線や原発事故の影響といった難しいテーマについての専門家ではありませんので様々な専門家と交流し、またモスクワで行われたセミナーに参加して私自身が子供たちに教えられるように自分で勉強してきました。そのあと、情報センターでは地域の住民に対して放射線とそのリスクについて伝えられるようなセミナーや行事を行っているのですが、最初に私がぶつかった大きな壁というのは、子どもたちではなく地域に住んでいる大人たちにどうやってこのリスクなどの情報を伝えるかということでした。大人たちに情報が足りていないということでまず大人たちに対して専門家を呼んでセミナーを開催したり、実際に専門家と対談して質問をぶついたり、セミナーが情報の足りていない大人にどう影響を与えるのか観察し、どのように事業を行っていくのかを考えてきました。そしてこういったセミナーを住

民のために開催したり情報教育を住民に対して行う時に非常に重要なのはコーディネーターの存在です。自分自身が専門家でなくても必要なテーマに合わせて、医者であったり、原子力の専門家、場合によっては再生可能エネルギーの専門家、農

〔子どもたちへの啓蒙活動—いかにして放射線リスクから身を守るか〕

そしてこのチェルノブイリ情報センターとして一番重要な取り組みの一つに、子どもたちに対する啓蒙活動—汚染地域に住みながらどうやって放射線のリスク、被ばくのリスクを下げるか—があります。例えば森も汚染されていますから森の中のどこにホットスポットがあってどこを避けなければいけないか、川でもどの川に汚染がたまっているのか、またベリー類やキノコを森の中で採取して食べる習慣がありますが、同じキノコの中でも白いキノコは放射性物質が溜まり易い、ベリー類はコケモモにはたまりやすいとか、また放射性物質に汚染されている可能性のあるキノコでも、どういう風に処置をしたら汚染度を下げることができるか、また牛乳についてもどこの地区の牛乳が汚染されている可能性が高いから避けるかとか、また森の野鳥や野生動物をハンターが捕り食べる習慣がありますが、野鳥や野生動物の肉は気をつけなければならないとか、生活習慣の中でどうやって放射線から自分たちの身体を守るかという教育に力を入れています。子どもたちに正しい身の守り方、知識を教えるだけでは十分ではありません。子どもたちが生活習慣の中でそれを実践して、本当に汚染のリスクを下げるようになっていく必要があります。また得た知識や方法を自分の家族、親や兄弟に語る、家族だけではなくて友達に教えていく、また自分が大きくなったら下の世代に伝えていく。そこまでできて初めてインフォメーションの取り組みがいきます。

子どもといっても、年齢によって理解度が違いますので、年齢によってプログラムやメソッドを変えて年齢毎の特性に応じて教えています。例えば子どもと言っても大学生であったり高校生であ

〔子どもたちは事実を知る中で自分で理解していく〕

専門家や学者と交流する中でビデオや様々な資料を手に入れることができます。また専門家だけでなく、多くの汚染地域に住んでいる一般の人た

業・農業化学の専門家等と交流しながら、必要な専門家を見つけてそのネットワークを活用して住民に正確な必要な情報を与えていくということです。そういうコーディネーターとしての才能や力量が試されています。



ったり、年齢の高い場合大人も交えての場合など幾つかのプログラムを行ったりします。また彼らに対して写真展なども行って、自分たちや地域の問題だけでなくより広く世界に目を向けたようなテーマで行っています。例えば2011年まではチェルノブイリ原発事故のを中心に扱ってきましたが、2011年に福島第一発電所事故が起きてからはフクシマ事故の資料、写真を集め展示を行うようになりました。また2つの原発事故だけでなく、悲劇が続いている、継続している歴史があるんだということで、原発事故だけでなく核実験の問題や他の核災害全般を扱った情報教育をより年齢の高い子どもたちに行っています。

ちからも新聞の切り抜きであったり当時の日記であったり、いろいろな情報を入手しました。また消防隊員として原発の消火に当たって亡くなった

遺族からも話を聞き写真を貰ったりしました。収束作業に当たった生き証人から話を聞きインタビューをまとめたりもしています。この回想は重視しています。また私はウクライナ出身なので、ウクライナのいろんな町を訪れてその住民たちの体験談を記録して資料にまとめました。これはとても貴重な資料ができたと思っています。この資料があるおかげで今の子どもたち、またその次の世代の子どもたちにチェルノブイリ原発事故の実態、どんな事故だったのか語り継ぐことができると思います。こういった学者の資料、実際の体験談を見る中で子どもたちは自ら分析し比較する中で、こちらから押しつけなくても、子どもたちは原子力発電所がどんな危険をもたらすかということをも自分自身で考えながら理解するようになっていきます。写真やビデオ教材、いろいろな資料を見たり様々な学者と交流する中で、子どもたちは原発事故の被害はどういうものなのか自分で知るようになります。原発事故は恐ろしいものなんだ、反対しなければいけないものなんだという考え方を大人から押し付ける必要はありません。こういった写真、ビデオ教材を見て触れる中で、子どもたちは人々の苦しみを本当に理解することによっ

て、子どもたちは、国から押しつけられる原子力発電というものは住民にどれだけのリスクを押し付けるかを自分で理解するようになります。例えばロシアや国際的な学者でもチェルノブイリ原発事故に比べればフクシマ事故なんてたいしたことはない、放出された放射性物質の量は少ないんだという人がいますけれど、事故のせいで避難しなければならなかった故郷の町と切り離されていつ帰れるか分からない、そういった苦しみは、大きいも小さいもありません。人々の苦しみに大小はないのです。そのことを子供たちは写真やビデオから学び、自分で考え、自分で結論を出してくれます。そして原子力に代わるエネルギーはないのか、そこで再生可能エネルギーなどの知識を得ることで、別のエネルギーがあり得るということを重要な点として気づいていきます。

長年、「ラジミチ」で経験してきたことを他の教員と共有することに力を入れています。

私たちの放射線防護教育の活動や経験はフクシマ原発事故後の日本の教育や活動にも生かせると思います。子どもたちの教育に関心があればこういった教材もありますので教授したいと思います。ご清聴、ありがとうございました。

(事務局の責任でまとめました。猪又)

チェルノブイリにない言葉―日露通訳の経験から

尾松 亮

8月上旬、ロシアのチェルノブイリ事故被災地で活動するNGO「ラジミチ・チェルノブイリの子どもたちのために」から、カーチャ・ブニコワさんが来日し、福島、広島、長崎を訪問した。

今回の訪問は、「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」の尽力で実現したものだ。筆者は、日露通訳としてカーチャさんの福島県訪問に同行した。福島県訪問中には、県内の学校の先生方や医療機関の代表者との意見交換を行った。

通訳というのは、いってみれば二つの言語、二つの思考形態を素早く行き来する作業だ。

一番苦勞するのは、日本語に特徴的な言葉、ロシア語にしかない言葉をもう一方の言語に変換するとき。でもその苦勞の瞬間は、文化ギャップや思考の違いを発見するチャンスでもある。「なんで日本語にはこの言い方がないのか。日本には、こういう考え方がそもそも足りないのではないのか」という風に。

二つだけ、通訳の苦勞から得た発見を紹介したい。

福島県の学校で子供たちに放射線のリスクを教える授業が「風評被害につながる」と批判を受けたこ

とがある、という。この話をロシア語に訳すのに苦労した。

ロシア語に「風評被害」という言葉がないからだ。辞書通り「間違っただけによる被害」、「誇張されたイメージ作りにより苦痛を与える」などと訳してみるのだが、伝わらない。「なぜ放射線防護の授業が間違っただけなのか」「誰が誰に対してどんな被害を与えたことになるのか」と聞かれると、説明に窮する。どうやら日本語で「風評被害」という言葉の意味が、はっきりしていないのだ。にもかかわらず、「風評被害対策」は県や政府の重点政策として位置付けられている。

私たちは「風評被害になるからやめろ」というあいまいな言葉で、リスクについての議論を避けてきたのではないかと。逆にカーチャさん達は、チェルノブイリ 30 年後も「風評被害」なんて言葉を使わずに、「地域の放射線リスク」を語り、子供たちに伝え続けている。

マーシャル諸島にも、スリーマイル周辺でも「風評被害」に当たる言葉はないと聞く。私たちは、翻訳不可能な変な言葉で、事故後の状況を語ってきたのではないかと。

とはいえ、通訳を通じた発見は、否定的な事例ばかりではない。もう一つロシア語に訳せなかったのが「医療生協」という言葉。株式会社でもない。慈善団体や NPO とも違う。この医療機関の理念や事業に共感する人々が出資する。株式会社と違い、大口の出資者も、小口の出資者も、同じように会員としての権利を持つ。

こんな制度はロシアにはない。これはひょっとすると、日本社会に特徴的な、地域の健康な生活を願う思いが生み出した、すごい考え方ではないか。

そう考えれば、日本語も捨てたものではない。被災の体験から、いい意味で翻訳不可能な、世界に伝えていくべき「ことば」や「制度」が生まれることを願う。

(2016 年 8 月 12 日)

尾松亮さんのプロフィール

ロシア研究者。フクシマ事故以降、チェルノブイリ被災者保護制度の紹介と政策提言に取り組む。2012 年、政府のワーキンググループで「子ども・被災者支援法」制定に向けた作業に参加。ロシア、ウクライナのチェルノブイリ被災地での調査をもとに「チェルノブイリ法」を紹介する著書「3・11 とチェルノブイリ法」(東京書店)、共著「原発事故 国家は同責任を負ったか ウクライナとチェルノブイリ法」(東洋書店新社)などあり。(8 月 10 日の大阪集会の案内チラシより。)



新希望

東日本大震災 月刊

■〒100-8051(住所不要)
希望新聞取材班
■ファクス 03-3212-0795
■メール kibou@mainichi.co.jp
■ツイッター(@mainichi_kibou)でも、被災地の状況や被災者支援に関する情報を随時発信しています。毎日新聞のニュースサイトでは、東日本大震災関連記事(<http://mainichi.jp/shinsai0311/>)をごらんいただけます。
■被災地に役立つ情報をお待ちしています。投稿は、氏名、住所、年齢、職業、電話番号(あればメールアドレスも)を明記してください。

チェルノブイリに学ぶ

エカテリーナさんは元小学校教育で、98年から同原発の北東180キロのロシア・ノボシロフ地区にあるNGO「ラディミチ」職員。付近は、日本の避難指示区域にあたる汚染があり、そこに残らざるをえない人々に寄り添って活動する。福島も被災者も支援する団体「チェルノブイリ・ヒバクシャ救済関西」の案内で福島を訪れた。



チェルノブイリ原発事故(1986年)による被害弱者の支援をロシア南西部で約20年続ける非政府組織(NGO)職員、エカテリーナ・ノボシロフさんが8月、福島県などの小中学校の教師らを訪問した。放射能(放射性物質)汚染地域での教育や健康管理の経験を話して交流した。

NGO来日 教員らと交流



放射線から身を守るブックレットを携えて来日したエカテリーナさん＝大阪府で8月10日

年齢に応じた放射線防護教育が大切だと強調した。その拠点が10年前に開設した「チェルノブイリインフォメーションセンター」だ。事を受け、専門家を招き、放射線の健康や環境への影響を学

【大島秀利、写真も】

ぶ。福島第一原発事故の資料や写真の特設コーナーもある。生活の中で放射線から体を守る方法は、ブックレットを作成し、丁寧に教える。具体的には、陸や川のような場所が放射能がたまるホットスポットになりやすいか、野生のキノコなどで危険なものはないかなどを示す。子どもを通じ、家族や友達に伝わり、さらに年下の世代に広げたいと話した。

子どもが汚染地域を離れて一時的に暮らす「保養キャンプ」が重要とされるが、利便性を考え、遠隔地ではなく比較的近い非汚染地域でキャンプ場を運営しているのも「ラディミチ」の特徴という。福島市立南陽中学の大槻知恵子教諭(理科)は「福島では組織的な避難ができません。思いを込めた住民がいた。ロシアなどから習習すべきところは国を挙げ取り入れるべきだ。放射線の基礎を理解させるためにロシアの教科書も参考に、教育のあり方を考えられれば」と感想を話した。

エカテリーナさんは今後福島も被災者や教員らと交流を続け、お互いに学び合いたい願っている。

毎日希望奨学金

東日本大震災で保護者を亡くした遺児を応援する「毎日希望奨学金」



2016年(平成28年)9月21日(水)夕刊

夕刊ワイド

2

知

特集ワイド

毎日新聞 夕刊

原発事故は大変長い期間、環境と人々に影響をもたらすことが国内でも実感されるようになった。その先例のチェルノブイリ原発事故(1986年)に、学生時代に同向き向く元小学校教育の女性エカテリーナ・ノボシロフさんが、大阪や福島を訪れた。交流を続ける「チェルノブイリ・ヒバクシャ救済関西」の案内で経験を話して回った。

エカテリーナさんは90年、教員養成学校(日本の高校を閉校し相当)に入学した。学校は、同原発

必要とする人がいる限り

地には、経済的な事情などで残さざるをえない社会的弱者がいた。そんな人々を支援する学生サークル「ラディミチ」に、エカテリーナさんは友達に誘われて入

の回りの世話を焼いた。孤児院や障がい児教育に携える班もあった。総勢約60人の学生が活動に参加していたという。

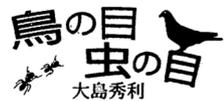
卒業後、いったん故郷のウクラ

イナに帰って、小学校の教師をしていたが、自分たちで企画して行動できるのが面白かったと88年、NGOに転職して「ラディミチ」に入った。卒業の時、自分の甲斐のホルモンの異変が分かったという。

今もエカテリーナさんは福地に残り、子どもたち向けにブックレットを作成し、生活の中で放射線から体を守る方法を丁寧に教える。陸や川のような場所が放射能がたまるホットスポットになりやすいか、野生のキノコなどで危険なものはないかなど。活動拠点はチェルノブイリの被害者の証言記録のほか、福島第一原発事故の資料や写真の特設コーナーも設けられた。子どもを通じて、家族や友達に伝わり、さらに年下の世代に広げたいと話した。

活動の原動力を尋ねると「学生時代、自分たちが勉強していたように、被災者たちが生きていけるように、少しでも希望を届けてあげたい」と話した。

(社)毎日新聞(大阪)
＝次回9月10日



2016 夏 ゴーゴーワクワクキャンプ メデイカルチェック

《猛暑のキャンプ》

今年の夏は、泣く子も黙る猛暑でしたね。

原発事故被災地の子どもたちの保養、ゴーゴーワクワクキャンプはどうしているかなあ！チェルノブイリヒバクシャ救援関西は、7月と8月に1回ずつ、毎年恒例になっている子どもたちのメデイカルチェックを手伝ってきました。

《しばし被ばくと離れて》

場所は京都南丹の自然豊かな農村。広がる田とあぜ道、小川、小さな森、裏山、ため池。今では貴重な大屋根の古民家で、しばし「被ばく」と離れて、田舎の親戚宅のように暮らし、体も心もリフレッシュしてもらいたい。そんな感じのキャンプです。ひとりひとり、さまざまな事情を抱えながら、夏の家に集い、短い時間ではありますが大家族となって生活をともにしておられました。

《メデイカルチェック》

昨年のメデイカルチェックで提案（汗疹対策）したシャワーがキャンプ途中で完成しました。

メデイカルチェックといっても、子どもたちは特に体調不良もなく、保護者の方の被ばくへの思いや心配事を伺うことが中心になりました。5年たって保養への期待も変わってきているようでした。被ばくとの付き合い方・生活設計も家族によって様々で、ニーズも多岐にわたります。リピーターの子どもたちは顔見知りで、私達が「先生の診察だよー」と言っても、にやにやしながら「また？」という感じ。(笑) 早く終わって遊びに行く気まんまんです。

《実はかなり貴重な普通の暮らし》

みんなですろってのお出かけやイベントもあるが、それぞれが好きなことをする時間が多いようです。寝転んで漫画を読んだり、ボランティアのお姉さんといっしょに4～5人でゲームをしたり、バドミントンをしたり、裏の川へ行ったり、ほんとに普通の日常です。

流しそうめんの用意を兼ねて、竹を切り、残りの竹で竹細工をするおじさんがおられると、最初は手伝いから始まって、寡黙な職人の弟子のようになって教えてもらう少年がいました。虫取りに泣くほど「はまって」帰る日を伸ばした子もいたようです。

クーラーもなければ、個室もない、ゲームセンターもスーパーもコンビニもない、自動販売機のジュースもスナック菓子もない。トイレは外。皿洗い当番や洗濯物たたみのお手伝いはある。・・・かなりハードな環境のゴーワークです。

だけど、買って来た惣菜でない手作りのごはん・近場の農作物中心の安全な食材・何かに真剣に夢中で取り組む体験・自然に中でボーとする時間、それを見守る目がある。実は「かなりかなり貴重な普通の暮らし」という気がします。それが人を癒すのかもしれない。

《保養の今後》

貴重なゴーワークキャンプの保養活動ですが、続けること自身厳しい環境があります。今後を語るにあたって、ゴーワークからのお礼のお便り（次に掲載）をご参照ください。

《子どもたちへの視線》

ストレスを持って来ている子どもへの接し方、叱るとき、ごはんの好き嫌い、もめごと、自動販売機、暴言、・・・ゴーワークでは、ひとつひとつ子どもにとってどうか、話し合っただけかかかわっているところが、いつもすごいと思います。被ばくとの長い闘いのなかで難しいことは多いけど、子どもたちへの視線が温かく確固としていることが財産だなあと。参加者とゴーワークメンバーは、言わば顔のみえる関係になっているのだと思います。こちらこそよろしくお願いします。

(長沢由美)

「ゴーワク」からのお便り

初秋の候、みなさまにおかれましては益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

この度は、私たちゴー！ゴー！ワクワクキャンプへご協力くださり、ありがとうございました。

今年は7月25日～8月28日の期間中に、こども47名（リピーター37名、新規10名）、保護者27名が福島・宮城・茨城・東京・神奈川・埼玉の6都県から参加されました。

ひとりひとり、さまざまな事情を抱えながら、夏の家を集い、短い時間ではありますが大家族となって生活をともにしました。

今夏はこどもと一緒に滞在する保護者が多く、家事やこどもの見守り双方で手伝っていただくことが多くありました。（おそらく疲れからの）発熱や怪我はありましたが、大きな事故等なくキャンプを終えることができました。さまざまな形で多くの方が関わってくださったおかげです。本当にありがとうございました。

キャンプ内容についての詳細は報告書・報告会にて報告いたします。

原発事故から丸5年が経ちました。ゴー！ゴー！ワクワクキャンプも8回目のキャンプを終えました。

あつという間に時間が経ったようにも思えますが、良くも悪くも確実に日々の積み重ねの上に今があることを感じています。5年が経ったとは思えない状況が多々ある中、時間は着実に過ぎ、悲しみも喜びも積み重なっていっています。近畿では今年から新たに保養を実施した団体が少なくとも4ヶ所あり、保養の必要性が知られるとともに、受け皿も増えていくことを望みます。

しかし、市民の手による保養の取り組みは地道に続けられているものの、すべてのこどもたちが保養の機会を得るためには行政の関わりが重要となります。今の状況を打破しようと取り組んでいる人や団体もおられますし、毎回の保養プログラム実施だけで手一杯というところもあります。

保養だけでなく、定期的な健康診断などの医療保障、移住を選択したひとへの生活保障、食品や環境中の放射線測定、被ばく労働に携わるひとへの保障…。「被災地」の状況は複雑であり、必要とされることも多岐にわたります。その中で私たちにできることは微々たるものですが、みなさまと共に、悩み、知恵を出し合いながら、ゴー！ゴー！ワクワクキャンプを続けていきたいと思えます。

今年も多くの方の関わりのおかげで「夏の家」を実施できましたことを本当に嬉しく思います。

様々なお力添えを、ありがとうございました。

今後ともどうぞよろしく願いいたします。

ゴー！ゴー！ワクワクキャンプ一同



みんなで野染め

8月23日 9団体の呼びかけで
「国の責任による福島原発事故被害住民と被ばく労働者の
健康・生活保障と原発再稼働中止を求める」
要請書を提出し、政府交渉を行いました
「救援関西」として、今回から呼びかけ団体に加わりました

8月23日、福島と全国の9団体の呼びかけで、「国の責任による福島原発事故被害住民と被ばく労働者の健康・生活保障と原発再稼働中止を求める」要請書提出と政府交渉を行いました。

福島原発事故後の2011年5月に、6団体（双葉地方原発反対同盟、原水爆禁止日本国民会議、反原子力茨城共同行動、原発はごめんだヒロシマ市民の会、原子力資料情報室、ヒバク反対キャンペーン）の呼びかけで、「住民の健康と安全を守り、生じた健康被害は補償することを求める要請書」が提出され、政府交渉がもたれました。その後、脱原発福島県民会議と全国被爆二世団体連絡協議会が「呼びかけ団体」に加わり、8団体の呼びかけで11回の要請と交渉が継続して取り組まれてきました。私たち「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」は、これまでもこの政府要請・交渉に賛同し、「福島の19歳以上の甲状腺医療費無料化」の署名に取り組むなど、全国の皆さんと協力して、これらの課題にも積極的に取り組んできました。

事故から5年余を経た被災地では、現実にある放射能汚染や被ばくのリスクを無視した「復興」が叫ばれ、多くの人々が事故による健康への不安を感じているにもかかわらず、それを公言することが憚れるような雰囲気がますます強まっています。そして国策による原発推進のために事故を招いた国の責任がますます曖昧にされようとしています。一方、原発事故の被害は長期にわたり、被ばくによる健康影響への対策は、これからますます重要になってくることを、私たちは広島・長崎、チェルノブイリのヒバクシャからも学んできました。「救援関西」として、今後長期にわたって被災地の方々との交流・支援を続けるとともに、東電はもちろんのこと、国の責任を問い、国の責任で事故被害者の健康と生活を守る施策を求める運動にも継続して取り組んでゆこうと、7月の運営会議で話し合い、今回の要請・交渉から「呼びかけ団体」に加わることになりました。

今回の第12回の政府交渉での要請事項は以下の7点でした。

1. 国の責任により甲状腺医療費を生涯無料化し、甲状腺に係る健康手帳を交付せよ
2. 国の責任により福島県民健康診断の拡充と医療費の無料化を行え
3. 20mSv基準による一方的な避難指示解除と住宅費支援打ち切り・賠償打ち切りを撤回せよ
4. 国の責任で、近隣県の汚染地域住民の健康診断・医療保障を行え
5. 国の責任による福島原発被害者への健康手帳交付など被爆者援護法に準じた法整備を行え
6. 福島原発事故汚染土の8000Bq/kg（クリアランスレベルの80倍）以下の公共事業再利用を撤回せよ
7. 緊急時作業被ばく限度の250mSv引き上げ省令を廃止せよ。原発再稼働を中止せよ

福島の被災地、関東、関西から、約30名が参加し、午前（項目6、7について、厚労省、経産省、環境省、原子力規制庁）、午後（項目1～5について、環境省、復興庁）にわたって交渉を行いました。項目1に関しては、環境省は、現在、福島県で行われている19歳以上の甲状腺医療費支援の「サポート事業は助成事業ではなく、調査の資料提供を得るため」との回答を繰り返し、患者さんが切実に求めている窓口負担の解消や生涯にわたる医療費無料化の要請には全く応えようとしませんでした。ただ、「県からの正式な要請があれば話し合う」とのことで、今後の対県要請も重要になってきます。項目3については、来年度からの住宅支援の打ち切りなど、緊急課題であるにもかかわらず「災害救助法の担当部署でない」として、回答すらされませんでした。

東京オリンピックに向け、避難指示解除を次々に推し進め、被災者支援を打ち切り、「健康影響はなし」と決めつける一方で、全国の原発の再稼働を進めようとする国の姿勢が諸に出た、各省庁の対応に憤りを感じ、さらに運動を強めなければ…と思いを新たにしました。（振津）

✂お知らせ✂

* 戦争はいやや！核なんかいらへん！フェスティバル

子どもたちに 核も戦争もない 未来を

場所：長居公園内 南児童遊園

日時：10月16日（日） 午前10時～午後3時

主催：反核フェスティバル実行委員会（06-6653-0038）

* 反原子力デー 関西電力への申し入れ行動

日時：10月26日（水） 午後4時～

場所：関西電力 本社

連絡：若狭ネット 072-939-5660（久保）

* 「救援関西」発足25周年 集会

発足からの25周年を振り返り、チェルノブイリ事故から30年、フクシマ事故から5年が経つ中で「チェルノブイリ・フクシマを繰り返さないために」「被害者の補償と人権の確立」のために何をしていったらいいのか一緒に考えましょう。是非おいで下さい！

日時：12月11日（日） 午後1時30分～4時30分

場所：大阪市立総合生涯学習センター 5階第1研修室



カンパ・会費納入／お礼とお願い

本当にささやかではありますが、今夏もベラルーシ・フクシマの子どもたちの保養キャンプへの参加に協力することができました。ご支援をどうもありがとうございました。またこれからチェルノブイリの被災者へも支援を届けたいと思います。

「救援関西」は皆さまからのご支援・ご協力のみで成り立っています。度重なるお願いで大変心苦しいのですが、会費納入とカンパへのご協力をどうぞよろしくお願ひいたします。

また、すでに納入いただいている方には、重複する失礼をどうかご容赦ください。

カンパ・会費の納入ありがとうございました！！

(2016.05.29～2016.10.03)

且保立子 大田美智子 小山師人 公庄れい 齊藤充子 阪口博子 村上千佳子 即得寺 大津貞美 山下晴美
原発の危険性を考える宝塚の会 赤塚弘美 鹿間桂子 田中章子 林みどり
(順不同・敬称略)

ニュース発行：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局

連絡先：〒591-8021 堺市北区新金岡町1-3-15-102 猪又方

tel: 072-253-4644

e-mail: cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp

郵便振替：00910-2-32752

口座名：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西